

第一日曜日  
教会学校 9:00～  
主日第一礼拝 9:00～  
主日第二礼拝 10:30～  
その他の日曜日  
教会学校 9:00～  
聖書を読む会 9:00～  
主日礼拝 10:30～

# 日本基督教団 麻布南部坂教会月報

2019 (令和1年) 9. 8

牧師 松谷 祐二

〒106-0047 東京都港区南麻布4-5-6 Tel & Fax 03 (3473) 1276  
E-mail church@nanbuzaka.com http://www.nanbuzaka.com/

祈祷会  
第2日曜日 礼拝後  
成人会  
第3日曜日 礼拝後  
婦人会  
第4日曜日 礼拝後  
教会附属 南部坂幼稚園

印刷 有限会社 創文社 Tel (3491) 8321

## 「神が救い出されたことを覚えて」

牧師 松谷 祐二

### 出エジプト記 第二二章一七〜二八節

「あなたたちは除酵祭を守らねばならない。なぜなら、まさにこの日に、わたしはあなたたちの部隊をエジプトの国から導き出したからである。それゆえ、この日を代々にわたって守るべき不変の定めとして守らねばならない。正月の十四日の夕方からその月の二十一日の夕方まで、酵母を入れないパンを食べる。七日の間、家の中に酵母があつてはならない。酵母の入つたものを食べる者は、寄留者であれその土地に生まれた者であれ、すべて、イスラエルの共同体から断たれる。酵母の入つたものは一切食べてはならない。あなたたちの住む所ではどこでも、酵母を入れないパンを食べねばならない。」

モーセは、イスラエルの長老をすべて呼び寄せ、彼らに命じた。「さあ、家族ごと羊を取り、過越の犠牲を屠りなさい。そして、一束のヒソブを取り、鉢の中の血に浸し、鴨居と入り口の二本の柱に鉢の中の血を塗りなさい。翌朝までだれも家の入り口から出てはならない。主がエジプト人を撃つために巡るとき、鴨居と二本の柱に塗られた血を御覧になって、その入り口を過ぎ越される。滅ぼす者が家に入つて、あなたたちを撃つことがないためである。」

あなたたちはこのことを、あなたと子孫のための定めとして、永遠に守らねばならない。また、主が約束されたとおりあなたたちに与えられる土地に入ったとき、この儀式を守らねばならない。また、あなたたちの子供が、「この儀式にはどういう意味があるのですか」と尋ねるときは、こう答えなさい。「これが主の過越の犠牲である。主がエジプト人を撃たれたとき、エジプトにいたイスラエルの人々の家を過ぎ越し、我々の家を救われたのである」と。「民はひれ伏して礼拝した。それから、イスラエルの人々は帰って行き、主が

モーセとアロンに命じられたとおりに行った。

(新共同訳聖書)

神による人間の救いの先例として、やがては全世界に広がる神の祝福の担い手として選ばれた、アブラハムとその子孫。「イスラエル」という名で呼ばれるようになった彼らは、ヨセフから後四百年にわたって、エジプトで奴隷として苦しめられました。そしてついに時は満ち、神はアブラハムとの約束の通り、モーセを遣わしてイスラエルの人々をエジプトから導き出し、「約束の地」カナンに帰らせようとされます。

しかし、エジプトの王は心を頑なに固めて、モーセが告げるイスラエルの神の言葉に耳を貸そうとはしませんでした。イスラエルの神、主は、エジプトに数々の「しるし」(そこに神の手を見て取るべき災い)をのぞませ、ファラオと、彼が体現するエジプトの神々、エジプト人に罰をお与えになります。その最後の「しるし」は、ユダヤ暦ニサン月一四日の夜、神がエジプト中のすべての初子を撃たれるという凄まじいものでした(それは、ファラオがかつて「イスラエルに男の子が生まれたら殺せ」と命令したことに対応していました)。そしてまさにこの夜に、イスラエルの人々はエジプトから脱出し、約束の地に向けて出発するのです。

最後の「しるし」に先立って、神はモーセを通してイスラエルの人々に命じておられました。家族ごとに羊を屠って食べ、その血を家の入口に塗っておくこと。主がエジプト人を撃つために巡るとき、そのようにした家は過ぎ越されて救われる。また、今後、この月を正月とし、神がイスラエルのエジプトから導き出して救われたこの出来事を、「過越祭」として代々にわたって守り伝えること。過越祭では、小羊を屠って過ぎ越しの記念の食事をします。また、事前に古い酵母を捨てておき、一週間にわたって、酵母を入れないで焼いたパンを食べ(この一週間は「除酵祭」とも称する)、また新しい酵母を用意して使い始めます。除酵祭はもともと農事暦上の慣習だったようです

が、イスラエルでは、エジプトでの奴隷生活の残滓を一切捨てて、神の民としての全く新しい門出を祝う、という意味が込められたようです。

この過越祭(除酵祭)は、ユダヤ人の社会では現在に至るまで守られ続けていますが、キリスト教にも、形を変えて受け継がれることになりました。すなわち、キリスト教会の礼拝の中で行われる、パンとぶどう酒を用いた「聖餐式」がそれです。イエス・キリストは、過越祭の始まるタイムニングで十字架にかけられて死なれました。わたしたちの今の暦では三月〜四月頃、キリスト教で言うイースター(復活祭)の頃です。その十字架の前の晩に、イエス・キリストは弟子たちと共に最後の食事をし、その席で、過越の食事を原型に、パンとぶどう酒を用いた、この新たな記念の食事を定められました。パンはキリストの体、ぶどう酒はキリストの血の象徴です。

聖餐式では、イエス・キリストがわたしたちの救いのために命を捨ててくださったことを覚え、屠られた過越の小羊の血によってイスラエルの人々が滅びを免れ、救われたように、イエス・キリストが十字架の上で「神の小羊」として流された血によって、わたしたちは神から罪を赦され、滅びを免れ、救われた。イスラエルの人々が古い酵母を一掃し、新しい酵母を使い始めたように、わたしたちは救われた後、罪に従う古い命を捨て、イエス・キリストに従う新しい命に生きる。イスラエルの人々がエジプトを出て約束の地へ向かっていったように、わたしたちは罪と死に支配された世界を出て、イエス・キリストに導かれながら、神の国への道を進んでいく。

「この儀式にはどういう意味があるのですか」と尋ねる人には、「だから、あなたがたはこのパンを食し、この杯を飲むごとに、それによって、主「イエス・キリスト」が来られる時に至るまで、主の死を告げ知らせるのである」(口語訳聖書 コリント人への第一の手紙二六章二六節、日本基督教団 聖餐式式文)。あのイエス・キリストの十字架の死によってこそ、わたしたちは救われた、ということこそ、覚え、伝え続けるのです。

# ボランティアで 出会った方々

宍戸 真理

私がほぼ毎週、欠かさず行くところがあります。それは、教会と日赤病院です。日赤病院では、小児病棟でボランティア活動をしています。

私が活動を始めたのは、今から二十五年前、末っ子が小学校に入学した時です。幼稚園の送り迎えが終わり、何か社会参加がしたいと思いました。主人に送られて来た同窓会誌で、日赤病院でボランティア活動をしている方の事を知りました。ご自身が病気で通院している待ち時間に、子供達に勉強を教えたい。と始められたとの事でした。

四十五年前、まだボランティアという言葉が一般的でない時に一人で活動を始められた、という記事を読んで、私も子育てが一段落したら、参加したいとおもいました。私が、「なすグループ」という小児病棟ボランティアに参加したのは、一九九四年です。すでに、二十五年の活動を続けていて、各曜日にメンバーが八人総勢五十人で、活動していました。リーダー奈須さんの指導の下に入院中の乳幼児の遊び相手、絵本の読み聞かせ、勉強の手伝い、食事介助などを、行っていました。退院した子供への訪問ボランティアもしていました。外出の出来ない子供の家へ行って、遊んだり、絵本を読んだりの一時を、過ごしました。また、ボランティア団体として、海外の

交流会に参加しました。私は、韓国のボランティア交流会に参加し、ソウルにある教会関連の病院と老人ホームを見学しました。韓国の方々は、皆クリスチャンでしたが、日本人の参加者の中でクリスチャンは、私一人でした。

韓国のボランティアの方々は、病院の中で、讃美歌を歌い祈ります。私達の日本のボランティアとの違いを見せつけられました。その時知り合った方と、今も親交を温めています。彼女の通う教会は、千人くらいの教会員がいて、あまりにも人数が多いので、教会へ行かない時には、ネット中継での礼拝を守るとの事でした。

南部坂教会の話をすると、「私の教会も以前は、小さな教会でした。その頃の方が、皆の顔も分かり、親しみもありずっと良かったです」と、言われ、そういう見方もあるのだなと、思いました。色々と貴重な経験をしたボランティアですが、今では、様々な問題も抱えています。メンバーの高齢化、継続する人の減少。また、少子化に伴って患者の数も減少しました。入院中に勉強をする子供もいなくなりました。

そして、一昨年リーダーの奈須さんが、急逝されました。亡くなる前日まで、ボランティア活動をされていました。グループとしての活動は、残念ですが終了することになりました。四十二年間の参加人数は、七百人をこえていました。

今も、私は個人的に活動を続けています。毎週木曜日、小児病棟に通い、赤ちゃんを抱っこしたり、絵本の読み聞かせをしています。

「だから、人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい」という気持ちで活動しています。

## 報告

\*松谷牧師は、八月五日(月)〜十七日(土)の期間、夏期休暇となりました。十一日(日)の主日第一礼拝では大司宣子役員、主日第二礼拝では宍戸信次郎役員が奨励をしてくださいました。

\*受洗、信仰告白、伝道者としての献身をお考えの方は、牧師までご相談ください。  
\*各献金(月定献金・特別献金、東京神学大学後援会献金、隠退教師を支える運動、神学生を支える献金、会堂建築献金)へのご協力を、引き続き宜しく願います。

## 《各部報告 八月度》

### 成人会

日時 八月十八日 主日礼拝後  
場所 教会堂会議室  
出席者 四名  
開会祈祷 菊池才知子  
内容

◇創世記 十二〜十六章

召命によってアブラムは全ての財産を携え、甥のロト、妻サライ、およびハランで加わった人々とカナン地方に向かい、先住民のいる土地に入った。アブラムは、旅を続けネゲブ地方に行った。その地方の飢饉

から更にエジプトへ避難した。彼は異郷で保身の為に公正ではないことをし、財産を増やす結果になった。妻サライの身分のことで、主はファラオと宮廷に災厄を見舞った。ロトも財産を増し、ネゲブ地方に戻った叔父・甥は夫々家畜や使用人が多く、問題が生じたため、分村した。ロトはヨルダン川流域の肥沃な低地を選び移り、ソドムまで天幕を移した。四人の王連合軍とソドム、ゴモラの王を含む五人の同盟軍が戦争をした時、敗走途中のソドム、ゴモラの王が事故で戦意を喪失し、四人の王連合軍は大勝した。ロトは財産もろとも捕虜になった。アブラムは一族の長として、奴隷の戦士たちとロトを救出した。四人の王連合軍はアブラムに敬意を払い、異教の最高神の祭司も天地創造の唯一神を崇めて祝福した。神を信じ、言葉を信じたが、約束には半信半疑だったアブラムは約束の保障を求めた。主は出エジプトを予告し、契約を結んだ。必ずしも堅固とは言えない信仰とご都合主義の保身に動くアブラムが主の召命を受け、主と契約を結ぶに至ったプロセスのドラマがこの十二〜十六章である。

◇次会は、九月十五日 十七〜二十一章

次回司会…佐藤忠昭兄  
開会祈祷 黙禱

### 婦人会

休会

